

第1章 1990年代以降の景気循環の特徴と景気の現局面の評価

1. 1990年代以降の景気循環の特徴とそのパターンの変化

景気を測る指標 ()・・・景気に敏感なさまざまな指標を合成したもの
()・・・経営者へのアンケート調査(業況判断DI)
()・・・日本国内の経済活動の大きさ



以上の3つの指標を基に景気の状態を読み解いていくのが経済分析の醍醐味！！

「失われた10年」と呼ばれる1990年代を振り返る

1990年代初め・・・バブル崩壊の影響で大きく景気が悪化

1993年10月・・・景気は緩やかに持ち直す

()年・・・緩やかな景気回復が持続(地下鉄サリン事件、阪神淡路大震災、1ドル100円を超える円高を経験しながらも、日本銀行が金利を一段下げたことによる)

()年5月以降・・・景気が悪化(消費税率が3%~5%に引き上げられ、消費が冷え込む。社会保障負担の増加)

()年7月・・・アジア通貨危機(タイ、韓国などアジア各国の経済が混乱し、アジア向け輸出が減少し日本にもマイナスの影響を与える)

()年10月・・・山一証券破綻(金融システム不安)

1999年1月・・・景気が持ち直す(IT産業の増産)

2000年・・・米国株価の下落をきっかけにITブームが終わる

2000年11月・・・景気が回復局面に入る

()年以降・・・米国、中国経済の拡大の影響により、輸出を中心に日本経済は回復基調

日銀短観の業況判断DIの視点

Q.なぜ景気は回復してきているのに、経済がずっと低迷していたように思えるのか?

A.

(日銀短観によると1990年代以降景気が回復したのは、1993年以降と1999年以降、2002年以降の3回で、景気動向指数と一致している。)

実質GDPの伸び率も低下

実質GDP成長率は景気と連動している

景気低迷 ()を拡大

在庫循環と設備投資循環

企業は需要の変化に在庫調整で対応 設備投資を増減して生産量を調整

2. 2002年度以降における景気回復の背景と現局面の評価

2002年以降景気は拡大、しかし雇用者所得伸びず。ただ、消費の中にも好調な商品がある。

「新三種の神器」()、()、()

「(本来の)三種の神器」鏡、剣、勾玉

「三種の神器」(高度経済成長期)白黒テレビ、洗濯機、冷蔵庫

3. 持続的成長への基盤は整ったといえるか

1990年代の景気回復パターンと変わった点、変わらない点

変わった点	変わらない点
失業率が下がってきた	外需依存型の景気回復が続く
実質GDPが高い伸びになった	既存商品の改良・応用型のヒット
新三種の神器がヒットした	正社員の採用には依然慎重

リストラの進展

()雇用には依然消極的・・・雇用者報酬はマイナスからプラスへ

海外需要が制約になる可能性

()上昇 ガソリン代などの値上げ 原油を精製した石油製品の値上げ

日本は省エネ化が進んでいるが、アジアの国では鉄鋼・化学などエネルギー多消費産業が主流。こうした国では日本よりも石油価格上昇への影響が大きく、輸出先の景気が悪くなれば日本からの輸出も減る可能性がある。

4 . 現状・先行きを知るためのポイント

景気動向指数の一致指数を見る。

日銀短観を見る。

実質GDP成長率を見る。